

おやつのじかん3 -ちょっとひとやすみ-

—もうひとつプラスすること—

NO. 50



細かいステップで育てていくことが必要な子ども達、どこかに相談に行くと、「ていねいに関わって」「しっかり向き合って」と聞こえるようなアドバイスがよくあると思います。

でも、「ていねいにするってどういうこと?」「向き合えたって時間はあるようでないのに…」「分かりやすく伝えようと思っても、子どもがこっちを向いてくれないのよ」と、モヤモヤしてしまうことが少なくないと思います。そこで今回は“ていねいに関わりとは?”を追求していこうと思います。

結論からお話すると、何か特別な働きかけを考えていくのではなく“今よりもうひとつ働きかけをプラスすること”それだけで子どもに伝わりやすくなり“ていねい”になります。何をプラスすればよいか?もちろん、子ども一人ひとりで違いますが…。

例えば、声をかけながら指差しも加えてみる。これなら1秒も余計な時間はかかりません。指の差し方には大きく2通りあります。ひとつは、伝えたいモノに触るように近くで指差しをする場面。もうひとつは、遠くのモノや場所を指差す場面。どちらも「何?」「どこ?」のヒントになります。指の先を見てくれるようになれば、次が容易です。当たり前のことのようにですが、意識して取り入れると、子どもも大人も、お互いに結構手応えがあります。

一回見せる(やってみせる)のも時間があればおススメです。その道具を、いつどうやって使うのか、その子がまだできなくても、見せていくことで知らせることができます。子どもに伝えるためだけでなく「ああ、ここが難しいかもしれない」と大人が気付くきっかけになることもあります。

何かができたとときにハイタッチをして終わるようにすることもおススメです。多少上手くいかなくても、ハイタッチで終われば、区切りは後ろ向きではなくなります。褒めてもらえるシンボルにもなります。(家族内なら、今でも遠慮せずできますね)

「そうか、～したかったんだ」と、子どもの思いを代弁する(リピートする)こともおススメします。たとえ、代弁した言葉かけがまだわからなくても、大人の表情や仕草、スキンシップで思いは伝えあえます。わかってもらえることが“伝えたい気持ち”を育て、ことばを育みます。また、代弁することが、ひと呼吸“待つ”ことにもつながります。やりとりがゆったりして、結果、子どもに合わせた関わりになっていきます。

何かを片付けたり、手伝ってくれたときに「ありがとうね」「助かったよ」と声をかけることもおススメです。口で言えばいいだけですからね。子どもも、言われれば悪い気はしないので、それだけでも“いい人”になれますよ。ついでに頭でも撫でてあげれば“いい人”2倍増しです。

“ていねい”に関わっていくために、もうひとつ我が子に何をプラスすればよいか?あんずの時間で一緒に考えていきましょう。ひとつ上手くいけば、次はその応用編ですね。より分かりやすく伝えられれば、子どもだって応じやすいので、お互いがOKで終われます。それがいちばんです。

ひとつプラスするだけで、風が気持ちよくなるので、声をかける回数は減ると思います。不思議なものです。 (R2. 7) K

